ベルギーの現代舞台芸術
――教育機関の拡充と情報網の整備[1]――

髙橋　信良
千葉大学国際教養学部

Contemporary Belgian performing arts
– expansion of the educational institution and improvements in the information network –

Nobuyoshi Takahashi

要旨

舞台芸術を再考し、その新たな可能性を模索するには、舞台芸術とは何か、その歴史と制作方法の変遷を理解せねばならない。そこで、教育機関と網羅的情報網が必要となってくるが、それはベルギー舞台芸術にとっても例外ではない。つねに独創的なダンスを発信し、実験的舞台を模索し続けるベルギー舞台芸術にとって教育の果たしてきた役割は計り知れない。そこで本論では、教育機関の創設過程と情報網の整備を概観することによって、フランス語圏とオランダ語圏が刺激し合って活性化されるベルギー舞台芸術の独自性が明らかとなった。

キーワード
ベルギーの舞台芸術、ベルギーの教育機関、ベルギーのコンセルヴァトワール、若き演劇、フレミッシュ・ウェイヴ

Belgian performing arts, Belgian educational institution, Belgian conservatoires, Jeune Théâtre, Flemish wave

1．はじめに

ベルギー舞台芸術の独自性とは何か。この問いについて、少なくとも1830年の建国から19世紀末まではフランスからの影響を抜きにして語ることはできなかった。しかし、20世紀に入り、とりわけ第2次世界大戦以降、ベルギー舞台芸術は国外への発信力を次第に強め、ダンスにいたってはヨーロッパにおける発信拠点のひとつにまでなっている。そこで重要な役割を果たしたのが「若き演劇 Jeune Théâtre」と称される若者たちの多くのカンパニーであり、とりわけ1980年代に世界を席巻した「フレミッシュ・ウェイヴ Flemish wave」の出現はベルギー舞台芸術の存在を世界に知らしめる大きなターニング・ポイントとなった。それでは、新興勢力がこのように台頭してきた土壌とはいったい何だったのか。そこに政府[2]の積極的な援助があったことはいうまでもないが、将来の舞台制作者たちを育てる教育機関の拡充や情報網の整備が下支えとなったことも事実であろう。

本論の目的は、この教育機関の拡充と情報網の整備に焦点を絞り、ベルギーの現代舞台芸術の独自性の一端を垣間見ることである。

2．コンセルヴァトワール

1784年、フランスのパリで国立の高等芸術専門学校が創設される。これが最初のコンセルヴァトワールであり、19世紀にはヨーロッパ各地で開校されることになる[3]。他のヨーロッパ諸国と同じく、ベルギーも建国当初からフランスのコンセルヴァトワールに準ずる芸術学院を開校し、それが20世紀の新たな教育改革の下地となっている。1990年代の教育制度改革以前、ベルギーのコンセルヴァトワールでは、修了者には「首席 prix」または「次席 accessit」の称号が授与されていた。具体的には、修了試験の得点80％以上が「首席第１位 premier prix」、70％台が「首席第２位 second prix」、60％台が「次席第１位 premier accessit」、50％台が「次席第2位 second accessit」となり、実際には「首席第１位」を獲得した者のみがコンセルヴァトワール修了者として第一線で活躍できたようである。その後、1990年代の制度改革により、現在では大学と同じように学士号と修士号が授与される制度に変わり、優等生だったかどうかは問題にはならない。

さて、ベルギーで舞台芸術を学べるコンセルヴァトワールは本論末尾の資料（「主たる教育機関」）に記載されている６校であり、そのうちフランス語共同体の管轄となるのが３校である。リエージュ王立コンセルヴァトワール Conservatoire royal de Liège は、声楽と器楽を専門とする音楽学校として1826年に設立され、翌年開校、1830年に音楽専門の王立コンセルヴァトワールに昇格しているので、王立コンセルヴァトワールとしてはベルギー最古ということになる。しかし、演劇・映画俳優高等専門学校 École supérieure d'Acteurs Cinéma Théâtre（ESACT）がそこに含まれるのはずっとあとのことである。現在は校長のナタナエル・アルク Nathanaël Harcq が演劇部門の責任者も兼担している

ことからも分かるように、演劇教育にも力が注がれている。

モンス王立コンセルヴァトワール Conservatoire royal de Mons は、リエージュ校と同じく、まずは建国以前の1820年に音楽学校として設立され、1882年にコンセルヴァトワールに昇格、王立になるのは第２次世界大戦後、1948年のことである。2012年からは、Arts２という名称の芸術高等専門学校 École supérieure des Arts に再編され、ヴィジュアル・アート、音楽、演劇の３部門の内、音楽と演劇を担当、演奏家や作曲家、俳優や舞台制作者を育成している。なお、ブリュッセル校については、フランス語圏とオランダ語圏に分離されているという特殊な事情があるので、あとでまとめて言及する。

次にフランデレン政府の管轄となるコンセルヴァトワールは３校である。アントウェルペン王立コンセルヴァトワール Koninklijk Conservatorium Antwerpen は1898年設立というわりと新しいコンセルヴァトワールであり、フランス語が国の公用語とされた19世紀において、オランダ語圏よりもフランス語圏での学校拡充に重点が置かれていたことが分かる。なお、2013年、アルテジスとプランタインという二つの高等教育機関が合併する際に、その中の４部局とは別の付属学校としてアントウェルペン王立美術学院と併合されるが（アントウェルペン・アルテジス・プランタイン・ユニヴァーシティ・カレッジ Artesis Plantijn Hogeschool Antwerpen、略称AP）、コンセルヴァトワールの名称はそのまま保持されている。特色は、まず、音楽とドラマの他に、コンセルヴァトワールとしては唯一ダンス・プログラムが存在することである。そして、1980年代の「フレミッシュ・ウェイヴ」の牽引役となったインターナショナル・アート・センターであるドゥ・シングル deSingel（1980年設立）と協働し、国内外への発信をうまく分担していることも注目すべき特色である。

ヘント王立コンセルヴァトワール Koninklijk Conservatorium Gent は、1835年に設立され、1995年からは、王立美術学院 Koninklijke Academie voor Schone Kunsten（KASK、1751年設立）とともに、ヘント・ユニヴァーシティ・カレッジ Hogeschool Gent の附属芸術学校となっている。トレーニング・プログラムの中にドラマと視聴覚芸術があり、ドラマ部門は KASK Drama という名称で広く知られている。

最後に、1832年設立のブリュッセル王立コンセルヴァトワール Conservatoire royal de Bruxelles について。1832年創設の同校は、1967年に Section francophone と Section néerlandophone に分離され、後者の正式名称は Koninklijk Conservatorium Brussel（略称KCB）である。とりわけ後者は、フランデレン政府管轄のコンセルヴァトワールで唯一ミュージカルを学べるコースが開講されるなど、分離後の特色を打ち出す努力が成されている（因みに、主たる部門は音楽と演劇の２部門、正確には演劇は「演劇と言語芸術」という名称になっていて、演劇と舞踊を言語芸術と身体芸術に峻別していることは興味深い）。また、Section francophone は、次章で言及するラ・カンブルや INSAS と2009年より連合してフランス語共同体の芸術高等教育学校の連携組織である ARTes の所属機関となり、コンセルヴァトワールの枠を超えた教育上の協働体制が確立されている。

コンセルヴァトワールの成り立ちをみると、まず学ぶ芸術とは音楽であった。また、一般大衆に門戸を開き、学習者の裾野を広げるようになるのは、20世紀末の教育制度改革を待たねばならない。しかし、制度改革以前からフランス語とオランダ語という二つの言語圏で競い合うようにそれぞれのコンセルヴァトワールが特色を打ち出していたことは注目に値しよう。両言語圏とも、舞台芸術=演劇という伝統を踏襲しながらも、フランス語圏では映像芸術という新部門をいち早く設け、オランダ語圏ではダンスやミュージカルといった演劇とは違う舞台芸術を取り入れることで舞台芸術を総合芸術として考える素地が作られたといえよう。その一方で、教育に演劇が取り入れられてからも制度的には長らく保守的で封建的な時代が続いたことも事実である。そこで、コンセルヴァトワールとは別の可能性を模索できる教育機関が切望されるようになる。その発端となったのが、ラ・カンブル=国立視覚芸術高等専門学校 La Cambre – École nationale supérieure des arts visuels（ENSAV）である。

3．ラ・カンブルから P.A.R.T.S. へ

ラ・カンブルは、建築家のアンリ・ファン・ドゥ・フェルト Henry van de Velde（1836–1957）によって1927年に設立された装飾芸術高等学院 Institut supérieur des arts décoratifs がその前身である。彼は、1912年にドイツのヴァイマールに同種の学校をすでに開校しており、それがのちのバウハウス[4]となったことは有名である。いずれにしても、同じような教育機関をブリュッセルに設立しようとした彼は、それから14年後の1926年、当時芸術科学大臣であったカミーユ・ユイスマンス Camille Huysmans（1871–1968、17代首相）の協力を得てブリュッセルでの学校設立を実現し、自ら初代校長となる。ラ・カンブルのシトー会修道院の建物を再利用して開校されたのでラ・カンブルと呼ばれるようになる同校は、1927年９月に80名の学生を迎え入れて発足する。1929年最初の免状は、演劇理論、演劇実践、職業としての装飾、芸術産業、織物芸術であり、建築の免状は翌年の1930年からである。1936年のフェルト退任以降、校長は、ヘルマン・テイルリンク Herman Teirlinck（在任期間：1936–1950）、レオン・スティネン Léon Stynen（1950–1964）、ロベール=ルイ・ドゥルヴォワ Robert-Louis Delevoy（1965–1979）、ジョゼフ・ノワレ Joseph Noiret（1980–1992）、フランス・ボレル France Borel（1992–2002）へと引き継がれ、現在はキャロリーヌ・ミエロップ Caroline Mierop（2003–）がその指揮を執っている。教師には、画家のポール・デルヴォー Paul Delvaux などの多くの実践家たちが採用され、学生には、コブラCoBrAのメンバーであったピエール・アレシンスキー Pierre Alechinsky（活版印刷、挿絵、写真を履修）や画家のジャン=ミシェル・フォロン Jean-Michel Folon などがいた。因みに、1980年に建築部門は独立して、ベルギー・フランス語共同体建築高等学院 Institut supérieur d'architecture de la Communauté française de Belgique（ISACF）となっている[5]。

同校はバウハウスのように工芸と芸術の融合を教育に積極的に取り入れたが、とりわけテイルリンクが校長の時代には、校内の特設舞台でアカロヴァ Akarova を踊らせるなど、ダンスの促進にも力が注がれ、ラ・カンブルは今日のベルギー舞踊芸術の端緒のひとつとして重要な役割を果たしている。

しかし、この時代におけるベルギー舞台芸術の最も重要な転換点は、何といってもユイスマン兄弟 Jacques et Maurice Huisman 率いる移動劇団 Les Comédiens routiers が1945年にベルギー国立劇場 Théâtre National de Belgique（TNB）になったことであろう。ベルギーの演劇界に初めて中枢となる機構が出来上がったわけだが、そうすると周辺の小劇団には、資金繰りの問題など、中枢機構が優遇される傍らで文化政策に対する不満が出てくる。それが実験演劇の機運と結びつき、「若き演劇 Jeune Théâtre」運動という大きなうねりとなるわけだが、それを下支えするかたちで新たな教育機関が矢継ぎ早に創設されることになる。それが視聴覚芸術院 Institut des arts de diffusion（IAD）、国立舞台芸術・放送技術高等学院 Institut national supérieur des arts du spectacle et des techniques de diffusion（INSAS）、リッツ芸術学校 RITS School of Arts（RITS）である。これらの教育機関がどのように実現したのか、この点に関しては INSAS を例として後述するが、これらの教育機関があったからこそ、1970年代に活躍することになる多くの「若き演劇」（Théâtre du Parvis、Ensemble Théâtral Mobile、Le Plan K、La Balsamine など）が存在し得たと言っても過言ではない。そして、次第に多様化してゆく「若き演劇」運動のために劇団相互の情報の共有化や文化政策に関する政府との交渉窓口の一本化など、情報網の整備が急務となってゆく。

1970年代末にはユーゴ・ドゥ・グレーフ Hugo De Greef が中心となり、フランデレン地域のアート・センター連合組織であるフランデレン・シアター・サーキット Vlaams Theater Circuit（VTC）が発足する。目的は、国内外の現代舞台芸術の紹介と文化政策に関する政府との交渉窓口となることであった。この組織が現在のフランデレン演劇研究所 Vlaams Theater Instituut[6]（VTi）の前身であり、同研究所は今でも文化政策的見地から舞台芸術のネットワークを支援し、舞台芸術に関する重要な情報拠点となっている[7]。一方、フランス語共同体における情報拠点は、舞台芸術会館であるラ・ベローヌ La Bellone – Maison du spectacle / House of performing arts であり[8]、舞踊に特化したものがコントルダンス Contredanse である。因みに、コントルダンスは、雑誌 *Nouvelles de Danse* とフリーペーパーの *NDD l'Actualité de la Danse* を発行し、ベルギー現代ダンスの最前線を知る貴重な情報源となっているばかりか、定期的にアトリエや研修会を開催してダンサーの育成にも力を注いでいる[9]。

舞踊学校に関しては、フランスから招聘されたモーリス・ベジャール Maurice Béjart のムードラ Mudra を引き継ぐかたちで1995年に発足した舞台芸術研究訓練学校（パーツ P.A.R.T.S.）がその代表的な役割を果たしている。ムードラとパーツに共通する特徴は、カンパニーの主催者が学校を組織していることである。一見すると日本の劇団に付属する

俳優養成所と同じようにみえるが、パーツの主催者であるアンヌ・テレサ・ドゥ・ケールスマーケル Anne Teresa De Keersmaeker の功績は、パーツをきちんとディプロマが出せる教育機関に押し上げたことであろう。コンテンポラリー・ダンスの教育機会の不足に答えようとした彼女は、他の公的教育機関の学士・修士課程と同等のカリキュラムへと20年の歳月をかけて近づけていった。その結果、現在では、３年修了時のディプロマである Training Diploma を学士相当、その後２年で授与される Research Diploma を修士相当と見なすことが許され、学生は学位の同等性 équivalence によって他大学の大学院に入学することも可能となっている。つまり、ダンス教育がダンサーを養成するだけではなく、その知識と経験を他の分野でも生かすことが可能となったのである。これは、ひとつの専門的知識を別の専門分野でも活用できる可能性を学生に与える非常に意義深い試みであろう[10]。

４．INSAS 創立の経緯

それでは、最後に INSAS 創立の経緯について詳しくみることにする[11]。

創立メンバーの中心であり、初代校長であったレイモン・ラヴァール Raymond Ravar は、ブリュッセル自由大学 Université Libre de Bruxelles の劇団〈若き演劇 Jeune Théâtre〉から演劇活動を始めた。その後、研鑽を積んだのちに演劇交流にも関心を抱いた彼は、ジャーナリストとして活動の場を広げることになる。そんな折、1958年にブリュッセルで万国博覧会が開かれる（４月17日～10月19日）。開催期間中、チェコスロヴァキアのパヴィリオンでは、舞台と客席を幻灯機 Lanterne Magique のようにみたてたスペクタクルが行われていた[12]。この舞台に衝撃を受けた彼は、直ちにプラハに赴き、プラハ芸術アカデミーの映像学部（Filmová a televizní fakulta, FAMU）を見学する。同校はモスクワの全ロシア映画大学という世界最古の映画教育専門大学をモデルにしたものであるが、彼はそこで新しい芸術を創造するためには教育が不可欠であることを痛感する。これが彼の学校構想の発端である。

さて、当時はコンセルヴァトワールやラ・カンブル以外に演劇を実践的に学べる場所はなく、映画などの映像技術に至ってはパリなどの外国に留学する以外選択肢はなかった。そこで、ラヴァールは演劇と映像技術を同時に学べる教育機関を仲間たちと構想し、ブリュッセル自由大学社会学研究所のドゥシー Doucy 教授に相談する。その頃別のルートでメディアの実践的高等教育機関が構想されていて、そちらに参画したのが仲間の一人ピエール・ラロッシュ Pierre Laroche であった。それが視聴覚芸術院の IAD であり、INSAS より３年ほど早い1959年に開校される。一方、先の社会学研究所内に新たな教育部門を発足させようとしたラヴァールは、ドゥシー教授の仲介で文部省 Ministère de l'instruction publique の事務局長であったピエール・シールドレイヤース Pierre Seeldrayers に相談する。しかし、事務局長の回答は、（とりわけ演劇と俳優養成は）大

学教育に組み込むことは難しいが文部省直轄の高等教育機関としてなら可能であろう、というものであった。そこで、ラヴァールと事務局長は新たな学校創設の可能性を検討することになる。話は非常に具体性を帯び、名称に théâtre ではなく arts du spectacle を採用することになった。そこには学校名に cinéma と télévision の意味を含める意図があり、そのために les techniques de_diffusion という言葉も付け加えるかたちで、最終的に国立舞台芸術・放送技術高等学院 Institut national supérieur des arts du spectacle et des techniques de diffusion、略して INSAS という名称が決まったのである。

しかし、学校の内容を具体的に検討しようとした矢先、1961年に不幸にも事務局長が亡くなってしまう。それでも計画をあきらめなかったラヴァールは、ドゥシー教授の勧めにしたがい、パリの映画学研究所 Institut de Filmologie de Paris を訪問し、そこでエドガール・モラン Édgar Morin をはじめさまざまな人と出会い、映画学校運営のノウハウを学ぶ。

また、1959年のカンヌ映画祭で衝撃を受けたアラン・レネ Alain Resnais の『二十四時間の情事 *Hiroshima mon amour*』のゼミナールを主催していたラヴァールは、そこで知り合ったアンドレ・デルヴォー André Delvaux をはじめ、彼の同僚であったジャン・ブリスメ Jean Brismée、そしてパリ在住のギスラン・クロケ Ghislain Cloquet[13]らとともに INSAS の映画部門の構想を固めることになる。

演劇部門に関しては、映画と舞台芸術を切り離さないという基本方針のもと、ストラスブールのフランス東部国立演劇センター Centre National Dramatique de l'Est（のちのストラスブール国立劇場 Théâtre national de Strasbourg）をモデルにし、ついに1962年、INSAS を創立する。また、ラジオの仕事にも携わっていたラヴァールは、音響部門の必要性も痛感し、芸術感覚のある音響技師、ジョルジュ・グルスキ Georges Gourski の獲得もめざすが、説得に時間がかかり、音響部門の開設は翌年の1963年であった。因みに、INSAS は、公式には先の文部省によってリッツ芸術学校 RITS School of Arts（フランデレン政府管轄）と同時に教育機関として認可されている。

INSAS の教師には、創立者たちの他にコメディ=フランセーズを指揮したピエール・エメ・トゥシャール Pierre Aimé Touchard やラ・カンブルでも教鞭を執っていたポール・デルヴォーなど、卒業生には、バルサミーヌ劇場 Théâtre de la Balsamine の創始者であるマルティーヌ・ウィッカート Martine Wijckaert をはじめ、1970年代の「若き演劇」運動を牽引する多くの演劇人、また映画界では2001年に数々の賞をとる『ノー・マンズ・ランド *No Man's Land*』の監督であるダニス・タノヴィッチ Danis Tanović（ユーゴスラビア）やダニエル・オートゥイユ Daniel Auteuil 主演で日本でも話題になった『八日目 *Le huitième jour*』（1996）の監督のジャコ・ヴァン・ドルマル Jaco Van Dormael らを輩出し、ラヴァールの思い描いた夢は現実のものとなったのである。

5．おわりに

こうしてみてゆくと、一見教育や情報は時代の要請にしたがって提供されているようにみえるが、ベルギー舞台芸術の教育で忘れてはならないのは、専門性の追求のみを重視したのではなく、思想や社会学や歴史など幅広い教養教育をどの教育機関にも一貫して課したことである。この幅広い知識が、舞台芸術の伝統的ジャンルの峻別にとらわれない柔軟な創作を可能とし、身体演技と映像の融合に代表されるようなベルギー独自の舞台芸術を生み出す土壌となったのではないだろうか。

建国してまだ200年も経っていないベルギーでは、新しいことが精力的に取り入れられるが、今日まで蓄積された知識と伝統が無視されるわけではない。舞台作品の制作者や批評家や研究者、延いては観客さえもが教育によって育成される。ベルギーにおいて、舞台芸術は教育によって創られていると言っても過言ではないのである。

主たる教育機関（アルファベット順）

フランス語共同体（ワロニー・ブリュッセル連邦）：

＊ Conservatoire royal de Bruxelles ブリュッセル王立コンセルヴァトワール（フランス語圏）
1832年設立。1967年に section francophone と section néerlandophone に分離され、後者がオランダ語名（Koninklijk Conservatorium Brussel、略称KCB）になる。

＊ Conservatoire royal de Liège リエージュ王立コンセルヴァトワール
1826年に創設され、翌年開校。1830年にはベルギー初の王立コンセルヴァトワールとなる。

＊ Conservatoire royal de Mons モンス王立コンセルヴァトワール
1820年設立の音楽学校を前身とする。1882年にコンセルヴァトワールとなるが、王立になるのは第２次世界大戦後、1948年のことである。

＊ Contredanse コントルダンス
ダンサーであり振付家である Patricia Kuypers によって1984年に創設。主たる活動は、舞踊に関する情報収集とその公開、出版物の刊行、アトリエや研修会によるダンサーの育成である。

＊ Institut des arts de diffusion（IAD）視聴覚芸術院
Pierre Laroche が中心となって1959年に創設。

＊ Institut national supérieur des arts du spectacle et des techniques de diffusion（INSAS）国立舞台芸術・放送技術高等学院
Raymond Ravar が中心となって1962年に創設。

＊ La Bellone – Maison du spectacle / House of performing arts 舞台芸術会館ラ・ベローヌ
画家であり舞台美術家であった Serge Creuz によって1980年に創設。

＊ La Cambre - École nationale supérieure des arts visuels（ENSAV）ラ・カンブル=国立視覚芸術高等専門学校

＊ Henry van de Velde（1836-1957）によって1927年に設立された Institut supérieur des arts décoratifs 装飾芸術高等学院がその前身。1980年に建築部門が独立して Institut supérieur d'architecture de la Communauté française de Belgique（ISACF）ベルギー・フランス語共同体建築高等学院となる。

フランデレン政府：

＊ *Etcetera*『エトセテラ』
1983年に創刊された舞台芸術専門誌。

＊ Herman Teirlinck Instituut ヘルマン・テイルリンク研究所
Studio Herman Teirlinck がアントウェルペンのコンセルヴァトワールに併合され、ヘルマン・テイルリンク研究所となった。スタジオ・ヘルマン・テイルリンクとは、作家ヘルマン・テイルリンクによって、アントウェルペンに1946年に創設されたフランデレンの演劇教育専門学校。

＊ Koninklijk Conservatorium Antwerpen アントウェルペン王立コンセルヴァトワール
1898年創設。ベルギーのコンセルヴァトワールでは唯一ダンスのプログラムがある。

＊ Koninklijk Conservatorium Brussel ブリュッセル王立コンセルヴァトワール（オランダ語圏）
1967年に Conservatoire royal de Bruxelles から分離。

＊ Koninklijk Conservatorium Gent ヘント王立コンセルヴァトワール
1835年創設。1751年に設立され、1771年に王立となった美術学院 Koninklijke Academie voor Schone Kunsten（KASK）とともに、現在はヘント・ユニヴァーシティ・カレッジの附属芸術学校となっている。

＊ Mudra ムードラ
王立モネ劇場の支配人であった Maurice Huisman が招聘した Maurice Béjart がユネスコとベルギー政府の援助により1970に創設した舞踊学校。

＊ Performing Arts Reseach and Training School（P.A.R.T.S.）舞台芸術研究訓練学校
Mudra 出身であり、王立モネ劇場のレジデント・アーティストであった Anne Teresa De Keersmaeker がモネ劇場と共同で1995年に設立した舞踊学校。

＊ RITS School of Arts リッツ芸術学校
Hoger Rijkstechnisch Instituut voor Toneel en Cultuurspreiding（HRITCS）として1962年に創設された RITS School of Arts は、2015年に王立の称号を授かり、Royal Institute for Theatre, Cinema & Sound（RITCS）王立演劇・映画・音響学院に改名。

＊ Vlaams Theater Instituut（VTi）フランデレン演劇研究所
舞台芸術に関する情報拠点。文化政策的見地から舞台芸術ネットワークを支援。初代所長 Guido Minne。2015年１月に Flanders Arts Institute に併合されたがフランデレン地域の舞台芸術に関する情報は今までのウェッブ・サイトで閲覧可能。

参考文献

１．Delhalle, Nancy,《Changer de théâtre, changer de monde – Les pratiques théâtrales des années 1970 dans le théâtre belge francophone》in *CHTP-BEG*, no 18, 2007.

２．藤井慎太郎、「演劇と国家　ベルギーの連邦化の過程と舞台芸術」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要　第３分冊、日本語日本文学 演劇映像学 美術史学 表象・メディア論 現代文芸』、早稲田大学大学院文学研究科、2013年。

３．*The World Encyclopedia of Contemporary Theatre* : volume 1 : Europe, edited by Don Rubin, Péter Nagy and Philippe Rouyer, Routledge, New York, 1994.

４．Vanderpelen-Diagre, Cécile, *Le théâtre royal du Parc – Histoire d'un lieu de sociabilité bruxellois (de 1782 à nos jours)*, Éditions de l'Université de Bruxelles, Bruxelles, 2008.

註

1　本論は、2013年に概観した「ベルギー舞台芸術」(『「ベルギー」とは何か？――アイデンティティの多層性』松籟社所収）の補足研究として、2016年２月13日に阪南大学あべのハルカスキャンパスにて開催されたケベック学会西日本地区第1回研究会(ベルギー研究会共催)での口頭発表の内容を加筆訂正したものである。したがって、本論で言及する情報は2016年２月現在のものである。

2　ここでいう「政府」とは、ベルギー固有の連邦国家制度を踏まえ、連邦政府と３つの共同体政府（フランデレン政府、フランス語共同体、ドイツ語共同体）を意味する。とりわけ、文化政策の中心となっているのがフランデレン政府とフランス語共同体（2011年５月以降ワロニー=ブリュッセル連邦が正式名称）であり、これら２つの政府が中心となって舞台芸術に関する教育機関や情報発信のための援助が成されている。各政府の文化政策予算については、藤井慎太郎著、「演劇と国家　ベルギーの連邦化の過程と舞台芸術」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要　第３分冊、日本語日本文学　演劇映像学 美術史学 表象・メディア論 現代文芸』（早稲田大学大学院文学研究科、2013年）を参照。

3　コンセルヴァトワール　conservatoire　とは、一般的に音楽や舞台芸術に関する国立の高等教育機関のことである。中世の教会に設けられた聖歌隊員の子どもたちのための教育施設 conservatori が語源。専門教育機関としては、1784年に創設されたパリのコンセルヴァトワールが最初。その後ヨーロッパ各国をはじめ、アメリカやオーストラリアに設立され、音楽や演技の理論および実技に関する専門高等教育機関の名称として定着する。因みに、パリのコンセルヴァトワールは1795年に国立学校として再編され、1946年に演劇部門が独立、国立高等演劇学校 Conservatoire national supérieur d'art dramatique と改称され、今日に至っている。

4　絵画，彫刻，建築，工芸における革新的教育法で有名なドイツの総合造形学校。1919年に建築家ウォルター・グロピウス Walter Gropius によってヴァイマールに設立。純粋芸術と工芸技術との融合を目的とした革新性が注目された。その後、1925年にデッサウに、1932年にベルリンに移転したが、1933年ナチスによって廃校になる。バウハウスの構想は、20世紀の工業化と大量生産によって失われてしまった製品の芸術性を回復し、手工業的芸術を現代の生産プロセスに融合させることである。このようなコンセプトが絵画や写真などあらゆる芸術分野へと浸透するとともに、建築などへの芸術性の導入にも貢献した。デッサウとヴァイマールの「バウハウス関連遺跡群」は1996年から世界遺産となっている。

5　Cf. http://www.lacambre.be/index.php?node=1

6　Cf. http://vti.be/en

7　「プレゼンター・インタビュー　フレミッシュ・ウェイヴの仕掛け人ユーゴ・ドゥ・グレーフ」（聞き手・構成：藤井慎太郎）を参照。Cf. http://performingarts.jp/J/pre_interview/1105/1.html

8　Cf. http://www.bellone.be

9　Cf. http://www.contredanse.org/contredanseV4/templates/index.php

10　Cf. http://www.parts.be

11　Cf.《L'INSAS a 50 ans. Raymond Ravar retrace sa naissance》: http://www.cinergie.be/webzine/l_insas_a_50_ans_raymond_ravar_retrace_sa_naissance

12　アルフレッド・ラドック Alfréd Radok 作、『ラテルナ・マギカ *Laterna Magika*』。演劇と映像を融合した幻想的なスペクタクル。このときの舞台装置家はヨゼフ・スヴォボダ Josef Svoboda で、この作品を切っ掛けに国際的に活躍した人物である。また、このとき同行していたミロス・フォアマン Miloš Forman は、こののちチェコ・ヌーヴェル・ヴァーグの旗手として活躍し、アメリカに拠点を移して『カッコーの巣の上で』や『アマデウス』を制作したことでも有名である。ラヴァールは、

彼らと親交を深めることによって演劇と映像の融合という着想を得た。

13　ベルギー出身の撮影監督。1979年、ロマン・ポランスキー監督の『テス』でアカデミー撮影賞を受賞。